

知里幸恵

知里幸恵（1903-1922）は、カムイユーカラと呼ばれる口承伝統叙事詩を書き写し翻訳することでアイヌ文化の保存に大きく貢献した作家・翻訳家でした。彼女が編纂した 13 編の日本語訳叙事詩は、アイヌの人物によってアイヌ語で出版された最初の本となりました。

知里幸恵は、アイヌが日本文化に同化を強いられる差別的な政策の時代に、北海道南西部の登別で生まれました。6 歳の時、彼女はカムイユーカラの語り部として知られる叔母のイメカヌ（1875-1961）と祖母のモナシノウク（生没年不詳）と暮らすため、旭川に転居しました。このような環境で、彼女は日本語とアイヌ語のバイリンガルとして成長しました。

1918 年、知里は、アイヌ語研究者の日本人言語学者、金田一京助（1882-1971）と出会い、彼から言語と文化について書くことを勧められました。知里は祖母と叔母が詠唱する様々なカムイユーカラを記録しました。これらの叙事詩は、オオカミやフクロウから、カエルや貝類に至るまで、様々なカムイ（神霊）の姿で現れる存在の一人称視点で語られていました。知里はローマ字を使って音声のままアイヌ語を書き記し、その後日本語に翻訳しました。

最初のカムイユーカラ集を完成させた後、知里は 19 歳で心臓病により亡くなりました。彼女の

原稿は翌年『アイヌ神謡集』（アイヌの聖なる存在の詠唱集）として出版されました。知里の

仕事は、日本人読者の間にアイヌ語とアイヌ文化への新たな尊敬の念を呼び起こしました。

『アイヌ神謡集』は、アイヌ文化研究者にとって今なお貴重な資料となっています。